



“超絶＝スリル”とは?～その秘密を分析

“速弾き”は
“超絶”の絶対条件ではない

この本は“超絶ソロ”が研究テーマだ。そこで、そもそも超絶＝速弾きというのが真実なのかここで検証したい。確かに、ギターの世界では超絶ソロと聞くと、速弾きソロを連想してしまう。しかし、ボーカリストなど、ギターの世界にそれほど興味のない人にギターの速弾きソロを聴かせても“超絶に感じてもらえない場合がある”ということを経験した人は認識すべきだ。さらに、ピアノ、バイオリンなど、ギター以上に速弾きを得意とする楽器はたくさんある。また、歌を中心に音楽を聴いているリスナーにとっては、曲中のギター・ソロの存在すら気づかないこともめずらしくない。では、どうすれば超絶感をリスナーに感じてもらえるのか考えてみよう。

“速弾き”は“スリル感”の
要素のひとつに過ぎない

著者は、“超絶感＝スリル感”と考えている。つまり、リスナーに“スリル”を感じさせることが速く弾く以前に重要になるのだ。“速さ”というのは、スリル感の要素のひとつでしかない。

“スリル感”と“安心感”の
対比が重要

右の表に、“スリル感”とその真逆である“安心感”について整理してみた。速弾きにそれほど興味のない人でも、リスナーをドキッとさせるフレーズを弾きたいという欲求はあると思う。また、良いフレーズにはスリル感と安心感が混在していることが多い。オリジナル曲の間奏や、アドリブ・ソロを弾きたい人は、各自で“スリル感”と“安心感”を検証してほしい。

“スリル感”を感じるフレーズ

聴き慣れていないフレーズ
▶例：4度（5フレット分）音程フレーズや、予想を裏切るフレーズなど。

音の流れが激しいフレーズ
▶例：音程差の大きいフレーズ。

音の動きが激しいフレーズ
▶例：速弾きソロなど。

聴き慣れていないスケール
▶例：ドレミファソラシド以外の音階。

リズムが取りにくいフレーズ
▶例：わざとリズムをずらすなど

複雑なハーモニー
▶例：テンション・コードなど。

“安心感”を感じるフレーズ

聴き慣れているフレーズ
▶例：典型的ブルージョなソロ、シンプルなコードのアルペジオなど。

音が自然に流れるフレーズ
▶例：スケール上に隣り合っている音や、3度音程を活用したフレーズなど。

音の流れが止まっているフレーズ
▶例：ロング・トーンなど。

聴き慣れているスケール
▶例：ドレミファソラシドなど。

リズムが取りやすいフレーズ
▶例：8分音符のみのストロークなど。

シンプルなハーモニー
▶例：3音構成のコードなど。